

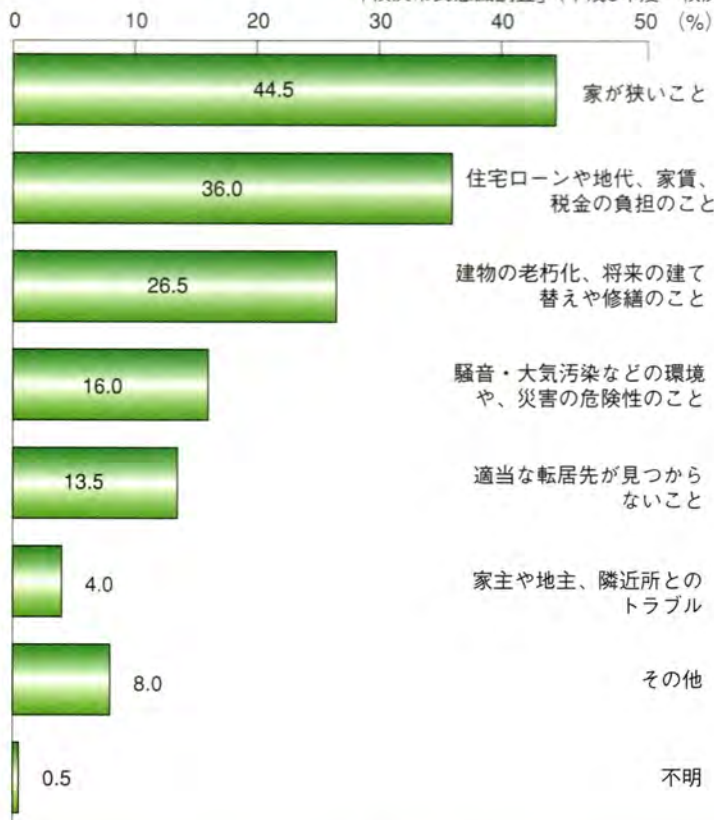
## 住宅・暮らしの心配ごと

昭和五十二年以後、「生活の心配ごと」における住宅に関する項目は、他の項目と同様わずかな増減を繰り返しながら減少傾向をたどり、昭和六十年を境に増加傾向に転じました。そして平成六年度調査からは再び減少傾向となっています。住宅に関する心配ごとは、平均すると心配ごとの三番目程度にあげられることが多く、またライフステージから見ると家族形成期、家族成長期といった場面での心配ごととなっています。

私たちの市民生活のあり方を眺める際に、生活の場を示す「住宅」そして時間の流れを示す「暮らし」。あまりに基本的なこの二つの視点を欠かすことはできません。この章では、私たち横浜市民の住まい方、暮らし方をトピックスを追いつながって紹介します。

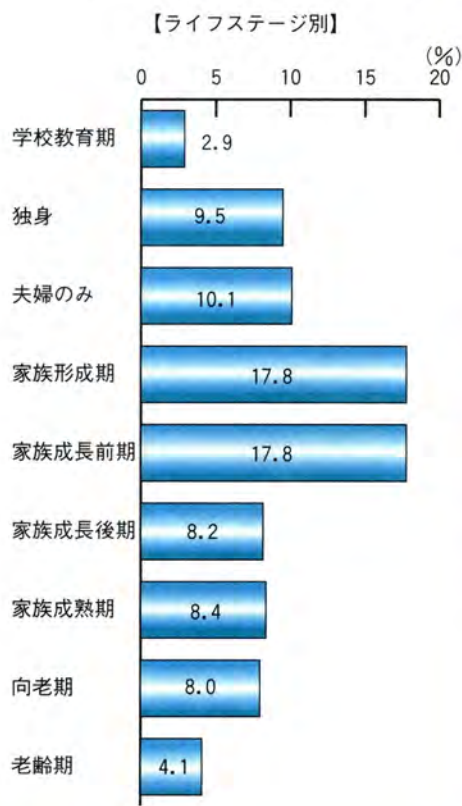
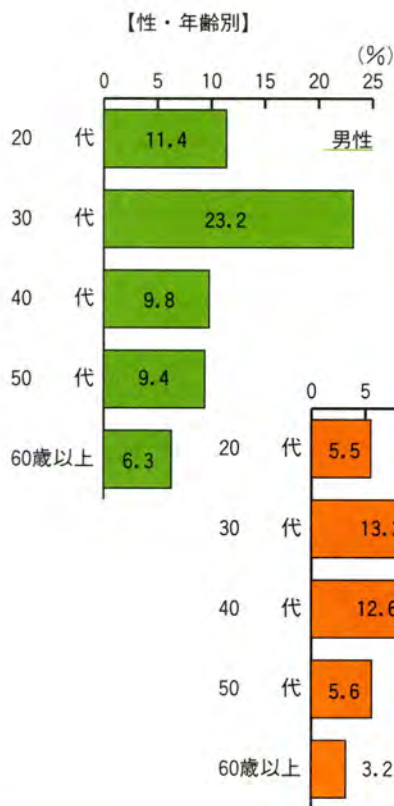
### 住宅についての心配内容 (複数回答)

「横浜市民意識調査」(平成8年度・横浜市)



### 住宅についての心配ごと (性・年齢別、ライフステージ別)

「横浜市民意識調査」(平成8年度・横浜市)



住宅についての心配ごとの主な具体的内容は「家が狭い」「住宅ローンや地代、家賃、税金のこと」「建物の老朽化、将来の建て替えや修繕のこと」。  
 ・男性は三十歳台、女性は三十歳・四十歳台が多い。ライフステージ別には家族形成期、家族成長前期が多く、男女年齢別統計と同調。

# 定住意向

## インタビュー



末次雄二さん

岐阜県出身  
横浜に住んで25年。  
東京にある消防関連の会社役員。  
44歳 南区在住

■横浜の一番好きなのところ？ 田舎っぽいところですね。東京はどこを歩いても都会という感じするじゃないですか。横浜というのは、都会という感じがしなくていいですね。

■いま、港北ニュータウンつくつていますけれど、私が住んでいるほうは大きな団地街とか、戸建て地域とか、商業地域のように町がそんなにはつきり区分されていないという感じがありますね。

■だから、町を歩いていると、小さな商店街がいつの間にか変わって、そのままざあっと住宅街へ雪崩れ込むみたいに、そうメリハリは感じないですよ。横浜は、そういうところから考えると、横浜のどこどこに住みたいという発想は、僕にはないです。知り合いがここにいたとか、勤めがそこだったとか、そういうことくらいだと思いますよ。

■でも、子どもが学校出るまでは、やっぱり離れられないですね。下の子どもあと三年で大学です。そうしたら、またどうなるかわからないですけど、でも、僕は横浜に住んでやりたいと思っっているんですよ。引っ越しはしたくないんだ。あいつらは、ここで生まれ、いなかはこのですよ。横浜があの子たちの故郷だから、ここで、ずうっと住んでいてやりたいという気はありますよ。

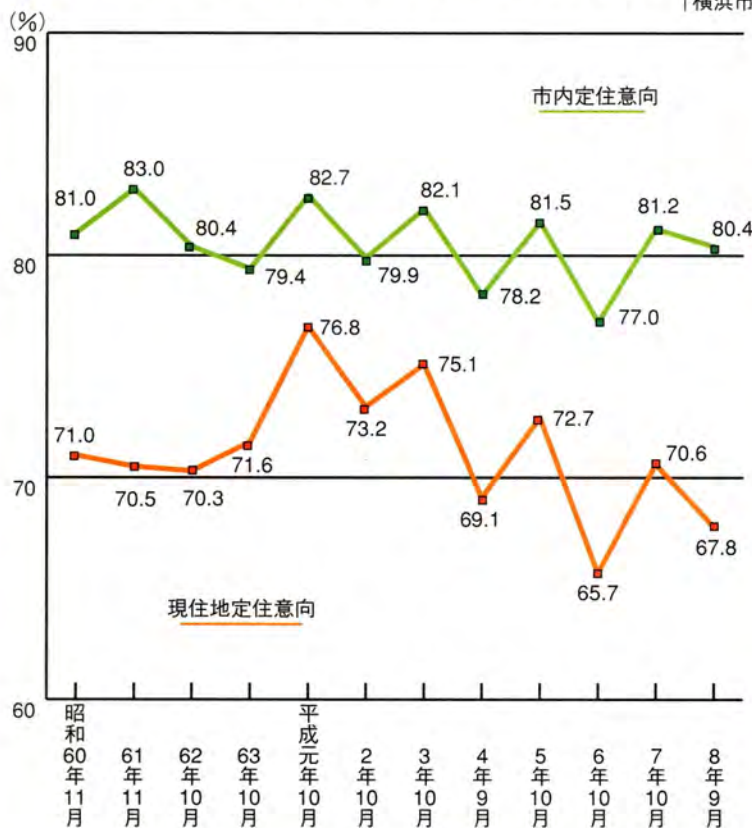
住宅・暮らし

## 現住地定住意向と市内定住意向の経年変化

〔横浜市民意識調査〕（平成8年度・横浜市）

・「現住地に住み続ける」と「たぶん住み続ける」に「横浜市内での」移転希望者を加えると市内定住意向は八〇・四％。

・市内定住意向は現住地への定住意向の比率と連動しながら常に八割前後を推移。



# 定住意向

住宅・暮らし

## インタビュー



湖出岳  
シュミット・ウテ夫妻

岳さんは横浜生まれの横浜育ち。  
ウテさんはドイツ生まれで、  
現在ドイツ語講師。子ども2人。  
36歳と34歳 港北区在住

■岳 昔から住んでる人の話を聞いてもね、やっぱりいろいろなところを流れてきて、横浜が居心地いいんで、っていう人が多いんですよ。だから、五十から六十歳ぐらいの人で、横浜に来るまでは何年か流れ歩いてたのが最終的には横浜で止まっちゃったみたいなのが多いのが多いみたいです。だから、なんとなく住みやすいというか……。

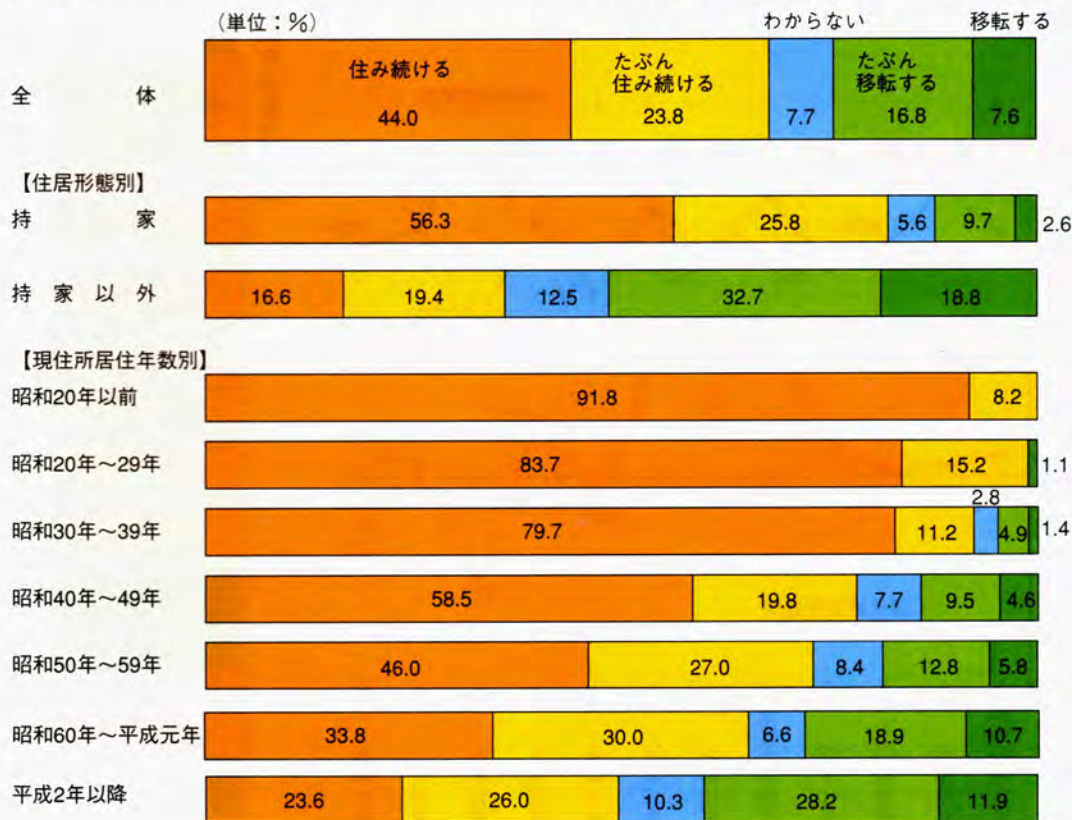
■ウテ 横浜にこだわり、ある。絶対、東京には住まないっていう。なぜかって言われてもわからないけれども。

■岳 僕はねえ、多分友だちだと思ってるんですけどね。誰でもそうだと思うんですよ。生まれて育って、一番感受性の高い時に刷り込んであるわけですよ、町の景色とか本当にその近所の家並みとかね。多分誰でもそうだと思うんですけども、泣いたり苦しんだりとかそういうのを刷り込んでいますよ。そうすると、一番は友だちですよ。普段はなくても、やっぱりそいつらがいるっていうのがあるから、多分みんな生まれたところが一番っていうのはそこだと思ってるんですよ。

## 現住地定住意向

(住居形態別、現住所居住年数別)

「横浜市民意識調査」(平成8年度・横浜市)



・住居形態別に見た現住地定住意向は「持ち家」が八二・二%と、「持ち家以外」(三六・〇%)の二倍以上。

## インタビュー



平山正義さん

鹿児島県出身  
西区で設計事務所を経営  
41歳 南区在住

■街を考えるのが仕事だから、街そのものに特徴が欲しいわけです。確固たる動かない強力な街のイメージが。港にはそういう要素があるわけでしょう、空間的にも経済的にも、環境的にも。だから、これは僕の話だけ、普通、日本の大都市でも、東京でもそうだけれども、お城があつて、それが城下町を形成していて、そこに街があつてというようにできています。それが明治維持後、解体されていく。そのお城の代わりが横浜は港だと思つていて、解す。だから、全然異質な過去を持つていて、それが広がつた街だから、特別な、ほかの都市にないでさ方だし、そういうものが今になつて全てを支配しているようなところがあるわけです。

■横浜は、全てを持つていていいわけでしょう。郊外に行けば畑もあるし、そして港もあるし。そういうトータルな意味での大都会。だから、東京で仕事をして帰つて来ると、やっぱりほつとすることもね。横浜に来るとほつとしますよ。それはいろいろなところを知つていたりとか、全部わかつていてということもあるんだらうけれども、大都市としてのコミュニティとして認識できていて、みたいなところがありますね。

■ずっと横浜に住み続けるだらうな、という強い信念はないけれども、そういう予感がありますね。

## 現住地に定住したい理由 (複数回答)

「横浜市民意識調査」(平成8年度・横浜市)

